



The Real Thing

洗口液は長期臨床データを有するものを。



2026
4.8 wed.
start

コンクールFサンプルセットキャンペーン

コンクールF(サンプル付き)セット
100mL×6個

セット内容	● コンクールF 現品	6個
	● 患者様用 トライアル ミニサンプル	10個
	● コンクールF パンフレット	10部

ご注文はお取引の歯科商店様へお願いいたします。

※キャンペーンセットがなくなり次第、終了とさせていただきます。



確かな品質の クロルヘキシジン洗口液

コンクールF 医薬部外品

内 容 量 100mL(約360~700回分)
参考患者価格 1,100円(税込)

う蝕・歯周病・口臭予防

① 長時間の殺菌持続力

殺菌成分グルコン酸クロルヘキシジン0.05%配合

② バイオフィルムの形成を抑制

う蝕・歯周病菌由来のバイオフィルム形成の阻害効果を確認

③ 炎症抑制

抗炎症成分グリチルリチン酸アンモニウム配合

<主な配合成分>

薬用成分 / グルコン酸クロルヘキシジン、グリチルリチン酸アンモニウム
矯 味 剤 / *l*-メントール、緑茶抽出液

※コンクールFはフッ素を配合していません。

コンクールFの 殺菌成分(グルコン酸クロルヘキシジン)は 持続時間が長いのが特長



一般的なマウスウォッシュに含まれている殺菌成分CPC(塩化セチルピリジニウム)と比較しても、長時間作用します。(殺菌成分CPCは、グルコン酸クロルヘキシジンと同じイオン性を示し、持続的に効果を発揮するといわれ、安定性がよく一般的なマウスウォッシュだけでなく歯科専売のマウスウォッシュにも使用されているメジャーな殺菌剤です。)

CPC (塩化セチルピリジニウム)	CHG (グルコン酸クロルヘキシジン)
3時間程度	7~12時間

Q コンクールFを使用すると歯が着色しますか?

A 適正濃度で使用したコンクールFでは、着色性を示しません。一方で、高濃度もしくは原液で使用した場合、クロルヘキシジンの性質により着色を引き起こす可能性があります。

■方法

歯面の白さを均一にしたウシの歯の歯冠部を用意し、ムチン含有の人工唾液に2分間浸した後、水・適正濃度のコンクールF・0.12%クロルヘキシジン溶液にそれぞれ1分間浸し、精製水で軽くすすいだ。その後、ウシの歯を紅茶で10分間浸漬。もう一度精製水ですすいだ後、自然乾燥した。

この工程を1サイクルとし、5サイクル繰り返すことでウシの歯のエナメル質表面にステインを形成させ、着色の程度を確認した。

■結果

高濃度の0.12%クロルヘキシジン溶液は、強い歯面着色が見られた。一方で低濃度に希釈されたコンクールFでは、水と同等の着色度だった。

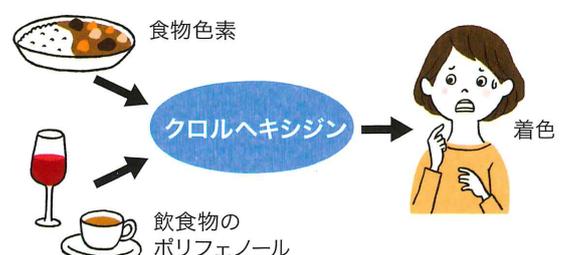
	試験前	5サイクル後	
精製水			コンクールFは、 水と同じ 着色度だった
適正濃度に 希釈した コンクールF			
0.12%グルコン酸 クロルヘキシジン 溶液			強く着色した

※適正濃度に希釈したコンクールFのクロルヘキシジン濃度は0.0006%

高濃度でのクロルヘキシジンは継続使用により飲食物由来の着色を引き起こす性質があります。その着色の程度は、飲食物のポリフェノールなどの摂取の程度と相関関係が強いといわれています。

しかしながら、飲食物由来の単なる「着色」なので、市販の研磨剤配合の歯磨剤でしっかりブラッシングすれば除去可能です。

またクロルヘキシジンだけでは着色性を示すことはありません。飲食物のステインを引き寄せることで着色性を示します。



コンクールFの長期臨床データ

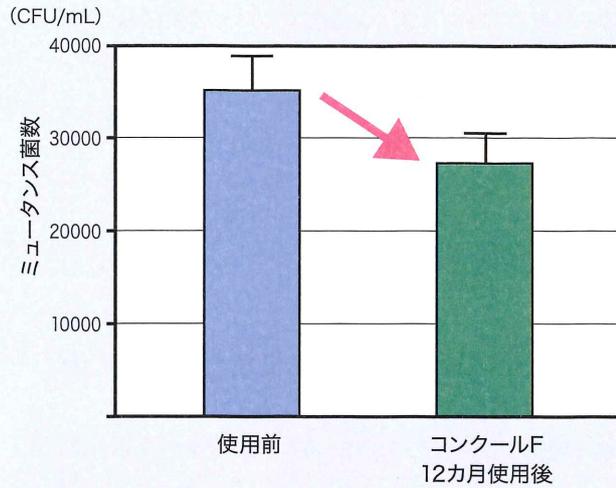


■う蝕菌に対する臨床試験※1 (N=57)

コンクールFを12カ月間使用後、
唾液中のミュータンス菌数を確認

結果

ミュータンス菌数約35,000から約27,000 (CFU/mL)
の有意な減少を確認した

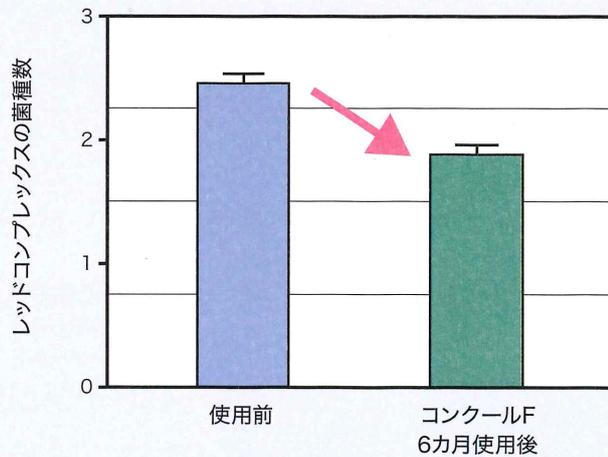


■歯周病菌に対する臨床試験※2 (N=173)

コンクールFを6カ月間使用後、
唾液中のレッドコンプレックスの菌種数を確認

結果

レッドコンプレックス3菌種の内、平均0.5菌種の
減少を確認した。



いかがでしょうか？数字で見ると意外にインパクトがないように思いますが、それもそのはず。予防用品は治療薬ではないので、元来長期的に活用することで、口腔内の衛生に緩やかに寄与します。使用後、数十分のデータでは実際の予防効果は測れません。

このデータは、コンクールFを長期的に活用いただくことで、う蝕・歯周病の原因菌を抑制し、一定の予防効果が得られることを示唆しています。

都合の良い解釈データに踊らされず、洗口液のお取扱いを検討の際は、「その洗口液は長期臨床データはありますか？」と問いかけてみてください。

※1 JMA journal, January 15, 2026; Volume 9, Issue 1

※2 Scientific Reports, 14, No.2777(2024)